

季刊

湘南自然誌

Vol.28

18畳の不思議空間

特集

うみねこ 博物堂

海外の美しい昆虫標本や鉱物から、レトロ感あふれる日本や欧米の骨董品まで、店主の趣味が全開となったお店(うみねこ博物堂)。

お店のコンセプトや店主の思い、商品の背景にあるエピソードなどを伺ってきた。

園児と自然に触れ合う中から生まれた

四季のコラム

園児や地域の皆さんからの投稿写真を季節毎に掲載

湘南発 みんなでつくる！
生きもの図鑑

地域の自然の中で遊んで学ぶ
ひらおかようちえん
アクションレポート

県立愛川ふれあいの村
吉田文雄学芸員によるコラム

心が育つ幼児教育

遊んで学ぶ生きもののこと

知育ゲーム



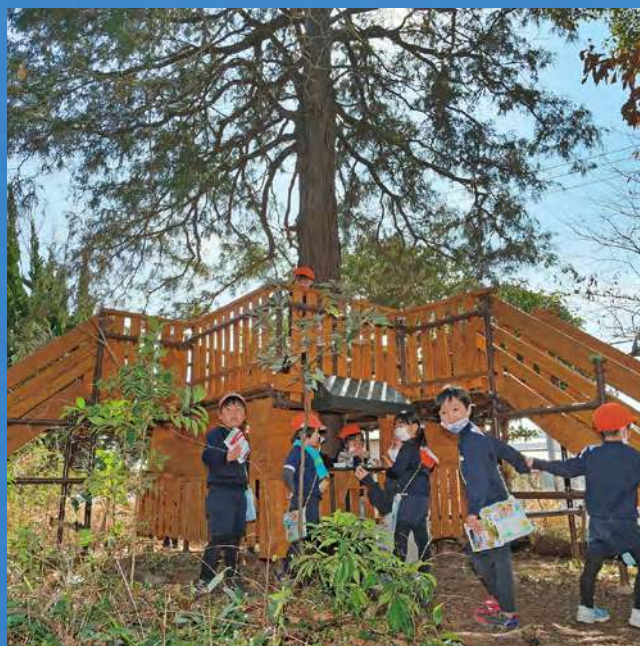


職員の手作り！ 平岡の森ツリーハウス

平岡の森に手作りのツリーハウスを建てようと計画を立ててから、1年10ヵ月が経ちました。コロナによる木材不足などでなかなか作業が進まなかったのですが、1月末によくやく園児が遊べる状態まで出来上がりました。

推定樹齢80年のイトヒバを囲うように作られたこのツリーハウスには、自然と繋がりのある遊びが様々な展開できるように、お店のようなカウンターなども設置されています。木の実や草花を使って料理を作ったり、綺麗な葉っぱをお金に見立てて買い物をしたりと、子どもたちが自由な発想で楽しむことができる人気スポットになりました。

ツリーハウスはこれでひとまず完成としますが、今後も1階の出入口や窓など細かいところを少しずつ作り足していく予定です。ツリーハウスの他にも、台地斜面の整備（フェンスや門の設置、斜面を登る通路作り）も少しずつ行い、子どもたちがもっともっと楽しめる場所にしていきたいと思っています。



2022-23 冬 自然はみんなのワンダーランド！ 四季のコラム

ほった よしのすけ
堀田 佳之介 ● 平岡幼稚園 園長

2022-23年冬に、平岡幼稚園の園だよりに掲載されたコラムを一部改変してお届けします。

はじめての 干し柿作り&試食

園内に4本ある柿の木。このうち平岡の森にある老木2本は、とても甘くて美味しい柿の実がなるので毎年園児と収穫して秋の恵みを楽しんでいます。一方、運動場の2本は渋柿です。そのため毎年眺めるだけだったのですが、今年、職員室の先生が干し柿づくりに挑戦しました。

干し柿づくりは“難しい”というイメージがあったのですが、皮をむき、さっと熱湯にくぐらせてから干すだけで、とても簡単でした。日を追うごとに水分が抜けて萎み固くなっていく、その変化の過程を見るのも楽しかったです。

干してから4週間。試しに1つ包丁で切ってみると、中から美しく輝く琥珀のような果肉が現れました。すっかり渋みは抜け、驚くほど甘いのです。クラスの園児からも食べてみたいという声があがったので、残りみんなで分かち合っていました。たくさん園児が「美味しかったよー!」と教えてくれました。

晩秋～初冬の時期になるとクラスのテラスに干し柿が吊るされて、園児が舌鼓を打つのが、平岡幼稚園の風物詩になるかもしれません。



天気のいい日に、職員室のテラスで干して作った干し柿。簡単に美味しくできました。

どのように散布される？ 植物の種子の不思議

冬になると園内で大きな綿毛が見つかることがあります。それはガガイモというツル植物の綿毛で、その下には種子が付いています。手に乗せてふ～っと吹くと、ふわふわと飛び子どもたちを楽しませてくれます。時には屋根よりも高く舞い上がることがある程です。

リュウノヒゲの実（種子）も子どもたちに人気があります。鮮やかな瑠璃色の実、冬枯れ色に染まる景色の中で特に目を惹きます。そして、この可憐な実の中には、透明感のある美しい種子が入っているのです。実も種子も宝石のように美しいので、探し集めて遊ぶ子どもの姿がよく見られます。

ある時、リュウノヒゲの種子がどのように散布されるのかを皆で考えてみました。子どもたちからは「（綿毛がないから）誰かが投げて飛ばしている」「転がって遠くへ行く」など、自分なりの考えがいろいろと出てきました。とある先生の予想は「鳥が食べて種子がお尻から出てくる」でした。確かに、人が実を摘んで移動したり、斜面を転がったりすることもあるかもしれませんし、鳥のお腹に入ったらかなり遠くまで種子を運んでくれそうです。なるほど～、とみんなで想像を膨らませて楽しみました。

植物は色々な方法で種子散布を行っています。服に種が付く“くっつき虫”なども面白いですね。種を見つけたら、それがどのように散布されるのかを、親子で一緒に考えてみると面白いと思いますよ。



上 / 大きな綿毛が付いた
ガガイモの種
下左 / ガガイモの実
下右 / リュウノヒゲの実と種

18 畳の不思議空間

うみねこ 博物堂

編集部では以前、昆虫採集用具を求めて伺ったことがあり、その際、店主の趣味が全開となったレトロ趣味あふれる品揃えに圧倒され、いつか本誌で取り上げたいと思っていた。

今回、この个性的なお店を営む店主の小野広樹さんに、開店前にお時間を作っていたことができた。この十八畳ほどの小さくも不思議な空間のコンセプトは何か？店主の思いや商品の背景・エピソード等を伺い、皆様にどんなお店なのかを紹介したい。



相模原市南区東林間エリアのシャンテ大通りから歩入ったところにある「うみねこ博物館」。昆虫類の標本や昆虫採集用品、鉱物・化石、図鑑といった自然科学系のものから、戦前の日本やヨーロッパのおもちゃ・ガラス瓶などの骨董品まで、さまざまなグッズを扱うお店だ。開店は2016年。また7年目ではあるが、昆虫好きや骨董好きの間では知る人ぞ知る存在となっている。

うみねこ博物館とは
どんなお店なのか？



自然科学と古物の店
うみねこ博物館

神奈川県 相模原市南区相南 1-2-2
メゾンド東林間 101

Tel 042-865-0977

開館時間：11：00～19：00
定休日：火・水曜日

小田急東林間駅よりシャンテ大通りを西（小田急相模原駅方面）へ徒歩7分。東林消防分署交差点左折2軒目。店の前に有料コインパーキングあり。



Web Site



「ミュージアムショップと骨董屋が合わさったようなお店を作ったら面白いんじゃないか？」店主の小野さんは言う。

子ども時代に、昆虫採集に明け暮れたり、変な形の石を見つけては宝物のように大事に隠し持ったり、貝殻や木の実を拾い集めたり、そんな記憶がある方も多いと思う。小野さんもそういう子どもだったそうで、このお店を「自分が子どもの頃にあっただらよかったのに」と思えるようなものにしたそう。

「このお店に来たことをきっかけにして、少しでも生きものや、自然に興味を持つてくれたら最高ですね。少し詳しく知りたくなったら図鑑などの本もそろえていますし、標本を見て自分でも昆虫を採集してみたくなったら網などの道具も用意しています。そうやって、あの手この手で引っ張り込んでいって、私が面白いと感じるものを、みんなと分かち合いたいなと思っています。」



海外の甲虫類を中心に、珍奇で美しい標本を常時500種類以上販売している。持ち帰り用の入れ物も用意されており、手ぶらで来ても大丈夫だ。



一般の書店にはなかなか置かれていない自然科学系の本が多く取りそろえられている。中には古本でしか手に入らないものも。



現代の作家による、生きものモチーフの置物やアクセサリ、絵画なども販売されている。ナミテントウの様々な模様が活かされたピアスも。



私が面白いと
感じるものを、
分かち合いたい。



昆虫採集用品や標本製作用品は、今ではインターネット通販で購入できるが、実際にどんなものか見て買いたいところ。ここでは虫捕り網などの昆虫採集用品、標本箱など一通りのものが手に入り、使い方のアドバイスもしてもらえる。店主自作の吸虫管(小さな虫を吸い込んで捕獲する道具)は、とても使い勝手がよく、編集部でも愛用している。



マダガスカル産のアンモナイトの化石。ひとつ800円。他にサメの歯や三葉虫の化石なども。このお店には数百円のものも多く置かれている。お客さんにワクワクする気持ちを持って帰ってもらいたいと、なるべく子どもでも買えるような値段のものをそろえるようにしてるそうだ。



海外産のお手頃な価格の貝類も多く陳列されている。中にはタコブネの殻など他であまり見られないものもある。



モダマ、クジャクジャ、ラフィアヤシ…初めて聞く名の海外の植物の実がいっぱい。どれも美しく面白い形をしている。



蛍石、水晶、黄鉄鉱、方解石…たくさんの鉱物が並んでいる。子どもは鉱物が好きが多い。店主自身博物館などに行ってはワクワクしながら眺めていたそうだ。



1896年～1900年頃のドイツの博物画。オフセット印刷が普及し出したのは百数十年前。それ以前の図版は石版や銅版などで刷られており、色は彩色職人が一枚一枚塗っていたようだ。



生きものが描かれた世界の切手。何でわざわざこんなマイナーな虫をモチーフに？というものがあって面白い。昆虫切手ばかりを集めてるコレクターもいるらしい。



100年以上前のイギリスやアメリカのカードが数百円で手に入る。タバコや重曹の販促品として同梱されていたものらしい。こちらも生きものモチーフ。

百年前にタイムスリップ
近世・近代の珍品に出会える



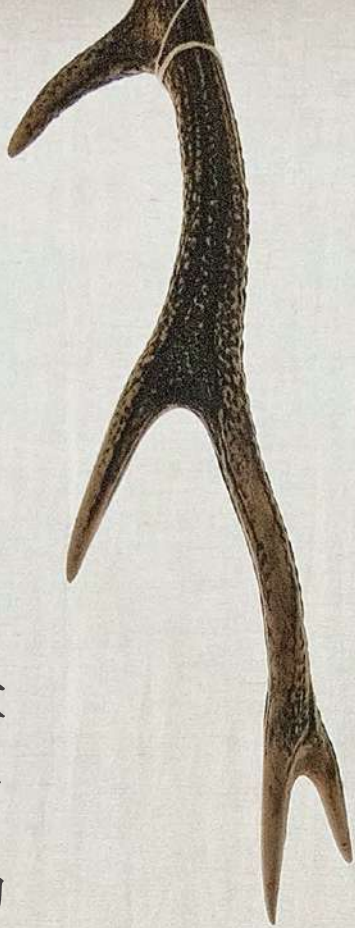
右にアメリカ製の義歯の色見本。中央にPaper Fasteners(割りピン)の入った古い缶。左は80年以上前のドイツ製のドールアイ。奥に見えるのはソ連のバッヂ。こうした珍品が所狭しと並んでいる。



棚の奥にさりげなく19世紀のパズルが。コミカルな昆虫が描かれている。この店の骨董系の商品は、よく見ると生きものがモチーフになっているものが多い。



世界中にコレクターが多いウランガラス。夜明け前、暗いけれども紫外線は差し込んでいる時間帯に緑色に輝く。店頭で紫外線ライトで光るところを見せていただいた。



このお店には、戦前の薬瓶、おもちや、ヨーロッパの博物画や切手等々：レトロ趣味の方にはたまらない品々も並んでいる。どれも店主のセンスでセレクトされたもので、生きものがモチーフになっているものも多い。店を出す前から趣味で集めていたそう、開店してからは、アメリカにも時々買い付けに行っていたらしい。

店主自身が欲しいと思うものはかなりなので、売れていくのが寂しい気持ちもあるという。一方で、分かってくれる人がいた、という喜びもあるとのこと。「このお店にはいろいろと古いものや変なものが置いてあります。今私たちが見ると、うわぁー、なにこれ！って思いますが、世の中につまらない物ってないと思うんですよ。お客さんにも、これらの品々から感動を味わってほしいんです。」

ここへ来ると、骨董目当てで来たはずの方が標本を買って帰ったり、逆に標本を買いに来た方が古いガラス瓶に魅せられて集め出したり、探したもののじゃないものにハマってしまう、そんなことが多々あるそうだ。うみねこ博物堂は、今まで知らなかった世界への好奇心が広がるお店だ。

世の中の物に
つまらない物はない。



和洋のアンティークなガラス瓶。紫色のものはガラスに含まれる二酸化マンガンが紫外線により変色したものの。元は透明だった。